慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シャトーブリアンの山に対する感受性
Sub Title	La sensibilité alpine de Chateaubriand
Author	大崎, 周平(Osaki, Shuhei)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.14, (2009.) ,p.64- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20091201-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャトーブリアンの山に対する感受性

大崎　周平

1.　はじめに

アルプスは中世以来何世紀もの間、自然の調和を乱す醜悪な異物であり、恐怖と嫌悪を抱かせる大地の突起物と考えられていたために、さほど人々の美的な興味関心の対象とはならなかった。しかし 18 世紀後半から 19 世紀にかけて、当時の思想的・歴史的・文化的な様々な要因によって、流行のトポスとしてロマン派の詩人・作家たちの霊感源となり、同時に社会的にも認知され、多くの旅行者が赴くようになったことはつとに知られている[1]。そのような時代の感性の変革をもたらした原因としては、交通網の発展、イギリス起源のグランド・ツアーの普及、地質学や地理学などの科学的知識の向上、1786 年のモン・ブランの初登頂、科学者たちによる調査と著作の刊行、山の崇高美を讃えた英独の外国文学の翻訳、バークの崇高美学やベスト・セラーとなったルソーの『新エロイーズ』の影響、亡命貴族の移住に伴う地理的発見などが挙げられよう。多くの芸術家たちがこぞってアルプスを取り上げていた時代にあって、山に対しては否定的な評価を抱いていたシャトーブリアンは特異な位置を占めている[2]。彼がアルプスを初めて見たのは、1803 年

[1] アルプス紀行に関する文献は、アンソロジーを含め膨大な分量に及ぶようであるのですべてを列挙できないが、フランスにおけるアルプスの表象に関する最も体系的かつ網羅的な研究書としては以下の文献を参照のこと。Claudine Lacoste-Veysseyre, *Les Alpes romantiques, Le Thème des Alpes dans la littérature française de 1800 à 1850*, 2vol, Genève, Slatkine, 1981.

[2] サント・ブーヴの指摘するところによれば、「山の敵対者」であるシャトーブリアンは「山を恨み、モン・ブランに喧嘩を売ろうとした」とある。Sainte-Beuve, *Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire*, Paris, Garnier, t.1, 1948. p.322.

ナポレオンに登用されローマへ大使館の書記官として赴任する際の旅路でのことである。翌年にかけて約半年ローマに駐在した後、1805 年には政治的な気苦労を避けてオーベルニュとアルプスのモン・ブラン方面を旅するが、その印象から書かれた旅行記の一つが『モン・ブラン　山の光景[3]』（1805）である。10 数ページにも満たない本旅行記は、同時代に流布していた山の崇高美に対するシャトーブリアンの反感から構成される論争的な文書である。この中で彼は、アルプス紀行の先駆者たちの著作を参照しつつ、同時代人の熱狂的な賛美によってアルプスの崇高美に認められていた壮大さや優美さなどの特質を疑問視し、また動植物の乏しさ、何ら詩趣のない風景、夢想には不適切な危険な自然環境、住民の惨めな生活などに言及し、ルソーの『新エロイーズ』第 1 部 23 書簡でサン・プルーが語ったアルプスの理想化、とりわけ高山の気候条件のもたらす精神と肉体への効用など、文学作品による誤った先入観に対して徹底的な反論を加えている。生涯の大部分を旅に過ごしたシャトーブリアンは、既にその時点で北部アメリカの山脈を始めとして多くの山を実際に目にしており、先駆者たちによる真実を越えた大袈裟な称賛や命名は耐え難いものであったようである。シャトーブリアンの真実へ忠実であろうとする態度は、本旅行記のエピグラフとして掲げられているボワローの「真実より美しいものはなく、真実のみが快いものである」という一節からも窺えることである。実体験に基づく個人的印象から、当時一般に認められていた山の崇高美が逐一論駁される本旅行記の筆致には、シャトーブリアンに特有の流麗な文体的特徴がさほど認められるわけではなく[4]、そ

[3] F. R. de Chateaubriand, *Le Mont-Blanc. Paysages de montagnes.* テクストは以下の最新版の全集を参照した。*Œuvres complètes de Chateaubriand*, Paris, Honoré Champion, t.6-7, 2008. また同時代のアルプス紀行を書いた作家との影響関係については以下の文献を参照のこと。Jean Rigoli, *Le Voyageur à l'envers. Montagnes de Chateaubriand*. Genève, Droz, 2005.

[4] 本旅行記の描写技法の特徴としては、簡潔で平板な記述、風景描写の代替としての無味乾燥な具体的地名の列挙、書物上の学識や神話などの慣習から借用された安易で皮相的な比喩の戯れとその多用などが見受けられる。いずれもシャトーブリアンにあっては比較的稀な表現技法に属するものであろう。

れどころか彼が反論自体に愉悦を覚えているかのような印象さえ抱かせる。

とにかく本稿ではシャトーブリアンの山に対する感受性や美意識について、『モン・ブラン』を中心に検証してゆくつもりであるが、本旅行記は彼の美学の一階梯を示すものに過ぎないので、『イタリア紀行』などの同時期の周辺作品や、『墓の彼方からの回想』（以下『回想』と略記する）を含め全般的に概観してみるつもりである。その際、シャトーブリアンによるアルプスの表現技法それ自体というよりも、山に対する反論を通して表明されている彼の風景描写の美学を中心に見てゆくことで、同時代人による山への過度の称賛には距離を取りつつも、一定の効果を認めているシャトーブリアンの感受性や想像力の一傾向性を垣間見ることが本稿の目的となる。

2. 風景によって呼び覚まされる記憶作用

まずシャトーブリアンのアルプスへの反撥の原因は、イギリス亡命中の1795 年の書簡にも既に求められる[5]。ここでは当時流行していた崇高美学の熱狂により生じる、実際の自然の客観的観察に基づかない想像力の混乱や、無秩序で誇張した表現を戒め、世界の真の調和と均衡と秩序とを守る必要性を唱えているのであるが、この風景描写の技法ついての書簡は、後のアルプスの熱狂に対する批判的眼差しを先取りするものである。

他方、旅行記が書かれた 1805 年頃のシャトーブリアンの状況を確認しておくならば、1803 年に愛人のポーリーヌ・ド・ボーモン夫人の死という悲運に見舞われ、30 代の半ばにして既に文学的栄光も職業上の失望も体験し、そしてまた若さに特有の熱狂と生命力の横溢の喪失や感受性の鈍麻をも自覚し始めていた失意の時期に相当する。『イタリア紀行』に収められた 1804 年 1 月のフォンターヌ宛書簡では、自然に対する活発で繊細な感受性の硬直化、または嘗ては原初の自然の中で体感できたような、水や風の微細な物音への鋭敏な感覚の鈍化などについて、「今日となっては、自然の魅力に対して実に鈍くなったと感じています。ナイアガラの滝も、以前と同じ驚嘆の念

[5] F. R. de Chateaubriand, « Lettre sur l’art du dessin dans les paysage », *Correspondance générale*, Paris, Gallimard, 1977, t.1, pp.71-72.

を惹き起こすものかどうか、疑わしいのです[6]」と苦々しくも心境を吐露している。年齢を重ねるにつれて人生にも未来に幻滅し、繊細な感受性を失ってゆくと無言の自然との交感が困難となるので、シャトーブリアンには過去の栄光や歴史的記憶の次元が必要となってくる。彼が古典古代の神話や文学や美術や歴史の溢れるローマに感動する理由の一端はそこに求められよう。実際に、モン・ブラン紀行文の巻末には、「別の色彩と調和[7]」を求めて後に訪れるギリシア・ユダヤ地方への旅の計画が明かされている。それらの地方の山々であれば作家の審美眼を満足させる魅力を備えているのである[8]。

シャトーブリアンにとっては既に数多くの先駆者が踏破していたアルプスは、原初の豊饒な自然を背景にあらゆる植物が繁茂し、雑多な動物の棲息するアメリカの荒野のような壮麗な魅力もなければ、廃墟によって絵画的光景を見せるイタリアや、西洋文明の揺籃の地である中近東諸国のように、聖書や伝説などの文学的・歴史的記憶に満ちた場所でもない。後の東方旅行は、西洋文明の起源の探究、またはキリスト教発祥の地への巡礼の旅という性格を帯びることになるが、当時人口に膾炙するようになったばかりのアルプスにはそのような歴史的な次元もなく、またアメリカの未開の自然が与える強烈な印象にも匹敵し得ない。実際、シャトーブリアンはアルプスの山中にあっても風になびく木々のざわめきから海の轟きを連想し、松の芳香から若き日のアメリカ旅行の記憶を呼び起こすことになる。

> 香りはまた常に私の精神の中に、かぐわしい微風が告げてくれたその美しい空、輝かしい海のある新世界の思いを蘇らせるのである。そこでは朝

[6] F. R. de Chateaubriand, *Voyage en Italie*, *Œuvres romanesques et voyages*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1968, t.2, p.1486.

[7] F. R. de Chateaubriand, *Le Mont-Blanc*, *op. cit.*, p.831.

[8] 『パリからイエルサレムへの旅』（1811）では、古典古代の歴史や聖書にゆかりの深い山の様々な名前には、特別な詩情が認められている。（*Itinéraire de Paris à Jérusalem*, *Œuvres romanesques et voyages*, *op. cit.*, t.2, p.822, p.840, p.875.）土地の固有名へ特別な愛着を持つシャトーブリアンの旅は、書物上の知識の確認としての性格を帯びることになる。

のそよ風が、森の香りを私に運んできたものであった。そして思い出のすべてが関連するように、香りはまた私の記憶の中で、船縁にもたれかかって、自分が失った祖国や見出そうとしていた荒野を夢想していたとき、私の心を占めていた後悔と希望の感情を呼び覚ますのである[9]。

このような記憶の想起によって、一つの未知の空間に別の既知の空間が層状に重なり合い、混合し、風景を観照する者の夢想が現在の時間と空間を越えて過去へと飛翔してゆくような想像力の運動は、シャトーブリアンの著作では頻繁に描かれる無意志的記憶の作用である。本旅行記が書かれてから27年後の1832年にも、アルプスの自然を描写する中で、結局のところそれらは若き日のアメリカ旅行の際に強烈な印象を受けたナイアガラの滝には及ばないと看做して、「私の記憶は、絶えず旅に旅を、河に河を、森に森を対比させ、そして自分の人生が自分の人生を打ち壊すのである。同じことは社会や人間に関しても起こる[10]」と述べているほどである。

ところで記憶の想起に際して海との関連がしばしば見出せることは示唆的である。海とはシャトーブリアンにとっての根源的な影像の一つであり、彼は海の水平線や嵐に立ち騒ぐ波の流動的で不安定な光景を、一定の距離をおいて水平的な観点から遠望することを好んでいる。アルプスのような聳え立つ巨大な山塊の垂直的な圧迫感、その峻厳さや不動性と固定性に対しては反撥を抱かざるを得ないのであろう。そこでは視界が無限の空間に開けるような眺望を確保できないため、想像力の自由な飛翔が困難となるからである。

[9] F. R. de Chateaubriand, *Le Mont-Blanc, op. cit.*, p.822.

[10] F. R. de Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1951, t.2, p.585. このような絶えず過去へと遡る記憶の性質のために、新たに目にする何事に対しても新鮮な感情を抱くことはできなくなるが、リシャールの見事な指摘にもあるように、そのような時間的立体感の意識によって生じる虚無や否定性が、シャトーブリアンのエクリチュールや旅の根本的な推進力の一つとなっている。Jean-Pierre Richard, *Paysage de Chateaubriand*, Paris, Seuil, 1967. 特に第6章（pp.103-119.）を参照のこと。

3. アルプスへの批判点とその美点

次にモン・ブラン紀行で述べられるシャトーブリアンの山に対する批判点を確認しておくが、第一に山は余りにも巨大であるために真の眺望が保てないので美しい光景はありえない、とされる[11]。巨大な山塊を至近距離から直接的に眺めるとき、視界が制限され、調和の取れた空間を把捉できないので、眺望は破壊されることになる。美の観照に必要な展望がなければ、形式・色彩・均衡も失われ、空間の偉大さは認められないのである。シャトーブリアンによれば山の風景においては、並外れて巨大な光景の枠組みに比べ、木々、川、動物などの風景を構成する各々の要素が通常の均衡を保っていないので、部分と全体の調和が保てないことになる。同様の理由から山に優美さを添えるものとされた花々も何ら効果のない些細な装飾として否定される。地平線には広大な空間を遠望できる視点が必要なのであるが、それも無限の視界が開ける荒野や海などを背景にして自己を中心に位置づけるというシャトーブリアンに特徴的な嗜好に由来するものであろう。また障壁のように屹立する山は、空の大部分を遮って陰を作るために夕日や朝日の壮麗な光景も期待できない。「空は風景のカンバスであるが、光景の背景にないのであれば、すべては雑然とし、効果のないものとなる[12]」と述べているように、山を遠景としてしか描かないような古典主義的な調和を理想とする絵画を基準にした見解である。例えばアルプスを扱った文学作品として有名なセナンクールの『オーベルマン』の第7の書簡では、主人公はダン・デュ・ミディ登攀の際に、アルプスの雄大な自然世界の背後に、調和に満ちた宇宙の秩序を幻視するという神秘体験をするが、そのような高揚感とは無縁である。

第二にアルプスには、その土地固有の記憶や歴史的な時間の層の堆積が欠如していることが不満の種となる。シャトーブリアンの旅行記では、古代文明の痕跡や歴史的事件にゆかりの土地を探索し、過去の失われた記憶を蘇ら

[11] F. R. de Chateaubriand, *Le Mont-Blanc, op. cit.*, pp.822-825.

[12] *Ibid.*, p.824. また山の風景における光の重要さは、後に『回想』36巻でも「風景は太陽によって創造されるに過ぎず、風景を作るのは光である」（*Mémoires d'outre-tombe, op. cit.*, t.2, p.592.）と説かれていることにも窺える。

せ、過ぎ行く時間の中で自己の運命を瞑想する、という構図が基本となっている。モン・ブラン紀行でも執拗に西洋古典への参照がなされているが、特にウェルギリウス的な農耕詩の伝統に則り、理想的な谷間とは「美しい思い出、響きの美しい名前、歴史と寓話の伝統のある土地[13]」であり、そのような古典文学によって培われた素養の観点から風景を観察し、馴染みの文学作品による記憶が実際の風景に背景として重なるか否かが評価の基準となっている。古代の人類の記憶を想起させる光景を前にすると、想像力は広大な過去の領域へと飛翔することが可能となるが、その典型例がローマの光景であり、1804 年のフォンターヌ宛の書簡ではシャトーブリアンの古典作家や廃墟への嗜好が雄弁に語られている。

ローマは古代の詩人たちの記憶に満ちた「古典主義の土地[14]」であり、喪の悲しみに暮れる旅人は、もはや存在しない崩壊した文明の痕跡である廃墟の風景を前にして、歴史の連続性や時代の変遷、または時間の堆積などに思いを馳せ、過去へと夢想を羽ばたかせる。個人的な記憶と歴史の集団的記憶とが結び付き、共振することで、廃墟の光景は特有の詩趣を帯びるのである。シャトーブリアンの描くローマの田園地帯は、冬という季節にもよるが、動物も住民も不在で、静寂と孤独の支配するもの悲しく空虚な光景として描かれている。そのような土地は、地上の全存在の必然的な凋落と崩壊の強迫観念に取り憑かれた人間を瞑想へと誘う最適の場所となる。嘗て栄えた文明の崩壊と不在の象徴とも言える廃墟は、不安や喪失感を抱き、憂愁に沈む人間の心情に呼応し、反響する。廃墟はそれを観照する者の内面に応じて、絵画的な光景となる。ここでの風景の美とは、対象そのものというよりも、それが観照者の主観に喚起する歴史や文学にまつわる記憶、または古代人の生存の痕跡を留める廃墟との相互の関連性の中に存するのである。

都市と廃墟とが見事に並存するローマで特に印象的なのは、古代の異教世界と中世キリスト教時代の建造物の混在であるとされているが[15]、それは異

[13] F. R. de Chateaubriand, *Le Mont-Blanc, op. cit.,* p.828.

[14] F. R. de Chateaubriand, *Voyage en Italie, op. cit.,* p.1477.

[15] *Ibid.,* p.1483, pp.1457-1458.

なる時代の時間的地層の光景を顕著に示しているからである。時間の不可避的な経過の中では、現在の建造物も過去の建造物と同じく崩壊するように、人間も同じ運命を辿るであろうという虚無感を抱かせる。既に『キリスト教精髄』で述べているように、人間が抱く廃墟への密かな愛着とは、「人間の性質の脆弱さや、荒廃した建造物と人間の生存の速さの間の密かな一致に由来する[16]」ものであり、廃墟には人間の生存の儚さとの微妙で深遠な関係を直観することができる。また人間自身が廃墟にも似た脆く儚い存在であるという発想も以前から繰り返されていることであるが、そこには人間の運命の有為転変と卑小さを慰める甘美な憂愁に浸された夢想がある。それこそがシャトーブリアンの想像力を刺激する要素となるのである。

同じく『イタリア紀行』に収録されたヴェスヴィオ火山登攀記でも、歴史的記憶があるために格好の瞑想の場となる。ダンテの地獄にも喩えられる火山は、恐怖を抱かせるほどの渾沌とした崇高な光景を呈している。その噴火口に下ってゆく旅人は、深淵の静寂の中で「哲学的な考察[17]」へと誘われ、人類の儚い運命へと思いを馳せる。そこでは古典古代の偉人や作家へのレフェランスが鏤められているように、過ぎた時代を回想することで死者たちとの対話が可能となる。また噴火口の深淵へ下ってゆく行為は、自己の過去や本源へと遡ってゆく姿勢をも象徴しているかのようであり、実際にシャトーブリアンはその深淵の縁に佇んで、生まれ故郷やそこで最初に耳にした海の音を思い出し、あてどなく放浪する自己の運命を凝視するのである。

山への第三の批判としては、環境と人間との調和が成立し得ない過酷な土地は夢想には不適切という点である。断崖などの危険に取り囲まれた山道は夢想しながら散策できる場所ではないし、何よりも思想や想像力を育むのは、圧倒的な巨大さを誇る対象ではなく、微細なもの、ささやかな対象である[18]。

[16] F. R. de Chateaubriand, *Génie du christianisme,* Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1978, p.881.

[17] F. R. de Chateaubriand, *Voyage en Italie, op. cit.,* p.1469.

[18] *Ibid.,* p.1466.

「人間の能力と器官の脆弱さとは調和しない[19]」とされるアルプスの山塊が与える圧迫感は、時間の重圧から免れ、人間的次元からは隔絶した自然の永続性と、時間の冷酷な支配に晒された人間の悲惨さと生存の儚さとの対比をより鮮明に意識させる[20]。そのような悠久の自然と人間との不均衡についてのいささか一般的な認識は、1803 年に最初にアルプスを見たときに覚えた「奇妙な感情」を韻文で謳った箇所にも見出せる[21]。そこでは語り手はアルプスという雄大な自然環境と対峙し、それと自己との対比を意識することで、自己の来歴を探求し、また人類全般の運命にも思い致すことになる。同時に『回想』の本文を執筆している 1822 年と、最初にアルプスを見た 1803 年の間の時間的な懸隔、及びその間のめまぐるしい政体の変遷を想い出すことによっても少なからぬ衝撃と眩暈を覚えずにはいられない。アルプスはシャトーブリアンに過去を想起させることで失われた時間を意識させ、悲観的な瞑想へと至らせる場となっているようである。アルプスを越える度に自分の人生を振り返るという素振りは、『回想』の他の箇所でも語られているのだが、それは後にも触れておくつもりである。

一方で山の光景の中で評価できる点として、雲の運動による風景の変化と月明かりの効果が挙げられている。雲の濃霧に覆われた岩山の輪郭は変幻自在にぼかされ、想像力を刺激する様々な姿を示し、また雲の動きによって不動の山が移動するような印象がもたらされる。そのように風景は、観照する者の主観的な解釈や内面的夢想の要求に応じて詩的なものとなる。この場面は、木々や急流や雪崩の立てる物音や動物の鳴き声など、広大無辺な空間の

[19] F. R. de Chateaubriand, *Le Mont-Blanc, op. cit.,* p.822.

[20] 後の『回想』でも、悠久の自然と人間の惨めな生存条件とを対比する語りは散見される。「常に失ったものを悔やみ、常に泣きながら、孤立しながら墓へと歩いてゆく。それが人間である。」（*Mémoires d'outre-tombe, op. cit.,* t.2, p.765.）

[21] F. R. de Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, op. cit.,* t.1, p.496. 「アルプスよ、君たちは我が運命には曝されなかった。／時間は君たちにとっては何でもない。／私の額にのしかかる年月を／君たちの頂は微かに漂わせているだけなのだ。（以下略）」

感覚を知覚させるような微かな音響に耳を澄ましながら、物悲しく佇む旅人の姿で閉じられていることからも明らかなように、瞑想へと誘う格好の空間に変容している[22]。

また月明かりの幻想的な効果はシャトーブリアンの偏愛する主題の一つである。空間を芸術的に秩序づけ、再構成する月明かりの効果によって想像力は解放され、現実の光景から夢想された光景への移行が可能となる。「照り返しのない単色の薄明かりの特性は、山塊を引き離すことで、また光景の部分を一体に結びつける色彩の微妙な推移を消滅させることで、対象を拡大することにある[23]」とされているが、つまりは月の蒼白い薄明かりが、日中の雑多で固定的な色彩のけばけばしい混合を淡い色彩で統一し、また部分と全体とを区別することで、風景の各々の対象の境界線は、融合し拡散することなく、その輪郭が収斂し際立つようになる。このように自然の光景が詩的に編成されることで夾雑物の排された美しい夜の空間が出現するのである。

ところでシャトーブリアンの美学が決定的に語られるのは 1832 年執筆部分の『回想』36 巻である。そちらの箇所では月明りの輪郭を明瞭にする効果にも増して、風景の混沌とした印象を増大させる夜の詩学とも言うべき観点が加味されているように見受けられる。月明かりの下では、日中の無秩序に入り乱れる輪郭や、眺望を阻害する山塊の角度、隆起、突出部、陰などが効果を増すとされる。それらの山を構成する要素が月明かりによって、「ピラミッド型、円錐型、オベリスク型、雪花石膏の建造物様式」など、自在な形に刻まれ、想像力の運動に応じて精彩を欠いた風景は活気を帯びるようになる。山の風景の個々の要素を刻んで行く様子については、「時にはその上に薄布のベールを投げかけ、微かに薄い青色の不明確な色調で調和させることで、また時には、それらを一つずつ彫り、偉大な調整の特徴によって切り離すことで[24]」と巧みに表現されているように、月明かりの薄明は、周囲の輪郭をぼかし、淡い青の色彩で統一的に染め上げるので、風景には調和がも

[22] F. R. de Chateaubriand, *Le Mont-Blanc, op. cit.,* pp.819-820.

[23] *Ibid.,* p.824.

[24] F. R. de Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, op. cit.,* t.2, p.592.

たらされるのである。夜の薄明かりは、現実の事物に超自然的外観を付与するような渾沌、漠然さ、不明確さといった特徴によって包み込み、事物の堅固さは限界にまで溶解してゆくが、その境界が完全に消滅してしまうわけでもない。各々の谷は「孤独と沈黙の神殿」となり、風景は夢想へと誘う非現実的な雰囲気を帯びる。さらに山の風景を活気付ける要素として、嵐、霧、雨空、雲、闇などの色調や季節に特有の自然現象なども追加されている。それらは、事物の輪郭や境界を曖昧にし、無限にまで拡大されるような渾沌とした風景に特有の魔術的な詩趣をもたらすものであるので、現実の風景の観照から想像力による瞑想へ、内面で思い描かれた光景へと至らせるのである。

シャーブリアンの山への反撥は、芸術創造における絵画を理想とする古典主義的な美学に由来するものであることは既に確認しておいたが、また同時に統一性、秩序、真実性などの古典主義的要素の中に、多様性、自由、幻想性などのロマン主義的な傾向、または風景に漠然たる外観をもたらす自然現象への嗜好も認められる。風景から受ける印象や感覚を直接的に表現するのではなく、その現実的特徴から内面風景の要求や夢想に応じて、風景を詩的かつ幻想的に彩る自然現象の要素を含めつつ、一定の眺望を確保し、形式・色彩・均衡の調和の取れた理想的な総体としての光景を構成することが目的なのであろう。モン・ブラン紀行の最後には、遠景としての山が美しくなるのは「霧のかかる地平線の奥で、澄んだ黄金の光の中で丸みを帯び、染められるとき[25]」であるとされている。そのような理想的な光景の実例として、『イタリア紀行』では「光と空の調和、一致」が見られる夕暮れのナポリ湾の光景や、ティヴォリのマエケナス邸の廃墟での遠望などが挙げられようが、いずれも広大な眺望が望め、山は背景に位置している[26]。このような色彩や明暗の対比の技法や、霧で暈され不調和な要素が隠された遠景の効果などによる風景描写の探求は、1804 年のフォンターヌ宛書簡でも表明されていることである。そこでは大地、空、海を組み合わせる調和の取れた光や、事物の輪郭と境界線を曖昧に暈す色彩の微妙な推移の効果など、クロード・ロランに認められるような「理想的で、自然よりも美しく見える光[27]」が称賛されている。最終的に『回想』36 巻でも、風景とはそれを描く人間の才能や情熱に依存するもので、「風景とはクロード・ロランのパレットの上にあるもの[28]」と結論を下しているように、その美学は一貫したものと言えよう。

[25] F. R. de Chateaubriand, *Le Mont-Blanc, op. cit.,* p.831.

[26] F. R. de Chateaubriand, *Voyage en Italie, op. cit.,* p.1464, p.1489.

4. 『回想』第 4 部でのアルプス紀行とその夢想

執筆時期が長期に及ぶ『回想』では、アルプスに対する見解は否定的なものばかりではなく、山の荒々しい自然と自己の運命と関連させるなど多少の共感も示している。シャトーブリアンがアルプスを見るのは生涯に渡って幾度にも及ぶが、ここでは代表的な例として、既に政界から身を引き、パリを離れスイス・イタリア周辺を往復して過ごしていた 1832 年頃のことを語った 36 巻を取り上げておく。旅日記の形式によって旅路での出来事や風景を語った本章は、バーゼルでホルバインの『死の舞踏』を見る場面に象徴的に描かれているように、老年の孤独と疲弊と悲哀や、迫り来る死の虚無を漂わせる陰鬱な雰囲気に満たされている。シャトーブリアンは、アルプスの風景に触発されて頻繁に過去を想起し、失った時間と人生の空しさを痛感させられるのである。そのような陰鬱な旅路にあってアルプスは、常に放浪の境遇にあるシャトーブリアンにとって流刑地のような印象を醸し出している。彼はアルプスの光景に接する度に、自己の運命と探究の対象に思いを巡らせるものの、何かが解るというわけではなく途方に暮れて、「年老いることできずに、それでも年老いた自分に禍あれ！[29]」と嘆かざるを得ない。そして 8 月 15 日、ルツェルン近郊のアルトドルフ滞在の際、聖歌隊の歌声を聞いて少年時代と故郷のコンブールを思い出す。「一つの手がこうして我が生涯の両端を結び、一連の歳月の中で失われたすべてのものをより感じさせる[30]」とあるが、ここで無意志的記憶の作用によって老年時代と少年時代との関連

[27] *Ibid,* p.1479.

[28] F. R. de Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, op. cit.,* t.2, p.593.

[29] *Ibid.,* p.577.

[30] *Ibid.,* p.579.

に思い至ったとしても、それにより意識されるのは、見出され、回復された時間というよりも、むしろ失われた時間の総量であり、その認識はシャトーブリアンを絶望させずにはおかない。その翌日には、以下のようにアルプスへ呼びかけるのだが、それは自己の芸術的才能の枯渇と、運命の終焉とを感じている老齢の悲痛な哀歌となっている。「アルプスよ、君たちの山頂を下げてくれ、私はもはや君たちには相応しくないのだ。若ければ孤独であっただろうが、年老いては孤立した人間に過ぎないのだ。（以下略）」

威容を誇るアルプスの大自然と自己の運命とを対比させて語るという、シャトーブリアンにありがちな倨傲ともとれるこの態度は、最初にアルプスを見た 1803 年の時点から共通している。未来への希望と野心があった以前であれば人間的次元を超絶したアルプスに、例外的人物としての自負を抱く自己を擬える矜持を有していたシャトーブリアンも、老衰して墓の虚無を間近に感じる現在となっては、もはや昔日の面影はないようである。

そして同日 8 月 16 日の嵐の夜、荒れ狂う破壊的な暴風雨の光景に誘発されるかのように、混沌たる内面の情念の活力が湧きかえり、情熱の激発が嵐と同時に昂進してゆく。

> 嵐が再び始まった。稲妻が岩に絡み付いている。反響は大きくなり、雷鳴を引き伸ばしている。シェッヘネルとロイスの轟きが、アルモリックの吟遊詩人を集めている。（中略）これらの山脈、雷雨、夜などは、私にとって失われた宝である。しかしながら、どれほどの生気を魂の内奥に感じていることか。（中略）私にはサン・ゴタールの山腹から、コンブールの森の我がシルフォードが出現するように思われるのだ[31]。

自然が猛威をふるって荒れ狂い、稲妻と岩とが混合するような幻想的光景に示されているように、自然の要素が無秩序に混交し、轟音が反響する渾沌たる崇高な光景を目の当りにして、シャトーブリアンの内面には青年期に故郷で覚えた激しい霊感が蘇る。そして恍惚として情熱の言語の横溢を感じる

[31] *Ibid.*, p.581.

彼の前に、孤独な少年時代の茫漠たる情熱の象徴とも言うべきシルフィードの幻想が出現するのだが、ここでの渾沌たる嵐はシャトーブリアンの愛の情念の熱狂的な混乱や内面の活力の横溢と対応関係にあると言えよう[32]。そこでは外面の嵐のように荒れ狂う内面は、狂気に隣接するような想像力を自在に飛躍させることで自己の願望に合わせて風景を変容させ、また理想の存在を創造できる能力を持つかのように感じるのである。嵐の中で恍然とし、幾つかの世界を創造できる内面の能力を直観したルネの姿とも重なるこのような想像力の性質は、ロマン主義的な熱狂状態にある魂に典型的な影像であろう。外見上は年老いたとしても、「なおも空想に耽り、理由も糧もない炎に責め苛まれている[33]」と感じるシャトーブリアンは、故郷のコンブールで理想の女性を創造した時の狂気にも似た霊感が枯渇することなく相変わらず持続していることを実感しており、当時と同じようにシルフィードに呼びかける。「来れ、我ら一緒にまた雲の上に昇ろう、明日経過する断崖に、稲妻と共に足跡を残して走り、照らし出し、燃え上がらせよう。来たれ！嘗てのように、私を連れて行ってくれ。だがもう運び戻してはくれるな[34]。」

このような内面の情念は、制御されることも実現化されることもなく、少年時代の夢想と同じく覚醒時の苦々しい幻滅へと失墜してゆくだけである。こうして以前からの夢想や永久に嵐に曝された自我が依然として残存していることを認識するに至るのである。この場面では、内面の活力が流出し循環することで、嵐という外面風景の特性と動揺した魂の状態との交感がなされているのだが、アルプスの自然環境は、錯乱した夢想を惹き起こす原因と

[32] このような内面風景と外面風景の照応については、既に『キリスト教精髄』から「人間には、自然の光景と自己とを関連させる本能がある」（F. R. de Chateaubriand, *Génie du christianisme*, *op. cit.*, p.721.）と述べられているが、とりわけ『回想』3 巻の「秋の喜び」（*Mémoires d'outre-tombe*, *op. cit.*, t.1, p.96.）において、嵐と凋落の季節である秋と人間の物悲しい魂との密かな共感関係について、最も典型的に表現されていることは有名である。

[33] F. R. de Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, *op. cit.*, t.2, p.582.

[34] *Ibid.*, p.582.

なっているわけではなく、さほど必然性のない背景に過ぎないようである。幻想の出現は山という外的環境よりも、やはり嵐に誘発された想像力の内的運動に起因するものであろう。実際に、シャトーブリアンが旅行中の孤独な境遇の中で、これに類似した精神上の危機、つまり過去の熱狂的な霊感が再湧出するという危機に定期的に襲われていたということは、『回想』の他の箇所にも見出すことができる。そのことは 1805 年のモン・ブラン紀行の直後の旅路でも認められるのだが、芸術の創作意欲を駆り立てるような狂気の霊感の湧出には、いずれもシルフィード幻影の出現が付随している[35]。

5.　風景を構成する根本要因としての主観性

最後に、山に対するシャトーブリアンの見解の総括がなされている『回想』36 巻の一節を確認して結びとしておきたい。ここでも「私は山の作家達のアルプスの高揚に達しようとさんざん苦労したが、骨折り損であった[36]」と更に辛辣な筆致で述べているように、全体としては 27 年前のモン・ブラン紀行で表明していた批判的意見を繰り返している。一応は山の崇高な自然に認められていた魂や情熱への影響や、無限の感覚や瞑想、詩への効果などは認め、そして風景の背景や隠棲所としてはある程度は評価しているのであるが、結局、美しい山の風景の性質を構成する要因は、観照する人間の情熱や才能や霊感、及び「生命の若さや、人格」などの主観的な要因に帰されている。風景とはそれを構成する事物固有の特性と観照する主体の心情、つまり魂の状態との相互の照応関係に依存するという、ロマン主義に特有の主観性を重視する風景描写の美学を認めることができるのである。山の光景とは対比的に列挙されるシャトーブリアンが偏愛する風景とは、孤立して立つ木、花、小川、苔、羊歯、曇り空、ツバメ、黄昏時の蝙蝠など、巨大な山の威圧的な自然とは対極に位置するような何の変哲もないささやかな対象からなる光景であり、「これらすべての微細なものが、何らかの記憶に結び付いて、

[35] *Ibid.*, t.1, p.585, p.1181.
[36] *Ibid.*, t.2, p.591.

私の後悔の幸福、または悲哀の神秘に恍惚となる[37]」とされている。

この個所の少し後、コンスタンツの湖畔をレカミエ夫人と散歩する場面では、シャトーブリアンが理想とする風景の条件が揃っていることも相俟って、湖畔の風光明媚な場所は魔術的な光景として出現し、自己の現在の居場所を忘れるほどの至福の境地が実現される。アルプスの連山の頂の光景を背景とし、自身に馴染の憂愁を帯びた夢想を喚起する草花や、聴覚に訴える微かで断続的な諧調や、木々を揺らす微風と湖の波の往来の音響に囲まれているとき、シャトーブリアンは久しく探し求めていた「美の魅力と理解[38]」を見出したように思うのである。この夢幻のような光景の出現には、理想の女性の具現であるレカミエ夫人が共にいたという事実とも関連しているのだろう。言い換えれば風景の性質とは、それを共に観照する人間の存在によっても左右されると言えるだろうし、そのことはアルプスとは対照的に称賛されているピレネー山脈[39]について語った個所でも確認することができる。その旅が夢想を伴う完全に幸福で陽気なものであったのは、歴史や伝説など過去の存在のもたらす甘美な憂鬱や、世俗的失望からの隠棲地としての山の魅力、またそこでの太陽の壮麗な輝きがあったというだけではなく、『回想』のヴァリアント「愛と老年」に描かれているような狂おしいまでの恋愛感情を覚えさせた愛人の存在にも影響されていると言えよう[40]。

以上、本稿では紙幅の都合上ごく簡潔にではあるが、シャトーブリアンの山に対する反感を通して、彼の風景描写における古典主義的な美学と、自然風景と心象風景との相互浸透作用に基づく主観性優位のロマン主義的美学との融合という観点を中心に、彼の感受性の一傾向を確認したまでである。

[37] *Ibid.*, p.593.
[38] *Ibid.*, p.597.
[39] *Ibid.*, pp.374-375. シャトーブリアンは 1829 年にローマ大使として赴任する旅路で湯治場として有名であった保養地コートレとピレネーを訪れている。
[40] 作家の伝記的事実に立ち入る余裕はないが、『回想』32 巻の本文で「オック人女性」と呼ばれた愛人の顛末については、F. R. de Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, *op. cit.*, t.2, pp.1463-1464.を参照のこと。